（『国語学』178集　1994・9・30）

音韻史の展開——音節構造の変遷——

母音優位・子音優位

——東西両方言の違いは、いつ、どのようにして、なぜ生じたか——

柳田征司

キーワード：東西両アクセント、母音優位・子音優位、二音節第二類動詞、特殊音節、音便

要旨

本発表は、現代の東西両方言間で対立している言語事象、ハ行四段活用動詞の促音便・ウ音便、形容詞連用形の原形・ウ音便、断定の助動詞ダ・ジャの違いが、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかについて論じ、これを踏まえて、東西両アクセントの違いが、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかについて、筆者の解釈を提出したものである。

〇、はじめに

私の発表は、東西両方言の違いが、いつ、どのようにして、なぜ生じたのかということについて私の解釈を述べ、母音優位・子音優位の違いが原因であるとする説が妥当でないことを論じようとするものです。三先生の御発表をうかがいますと、私も、モーラ言語・シラビーム言語という視点から見る時日本語音韻史がどのようにとらえられるか、といった主題で発表すべきであったかとも思いますが、そのことについては既に発表したことがありますので、本日は、モーラ言語・シラビーム言語という視点から日本語音韻史を見るのは有効である、という立場に立って、モーラ言語・シラビーム言語という問題が更に日本語音韻史のどのような問題にまでかかわっているか、ということについて考えてみたことを発表させていただきます。

一、先学の説

西部方言を母音優位の方言、東部方言を子音優位の方言ととらえるとらえ方は今日通説になったかのように思われます。表1にあげたような言語事象がその例として指摘されてきました。

この説は、東西方言の性格の違いをとらえたものであるにとどまらないで、東西方言間に違いが生じた原因として説かれることが少

なくありません。すなわち、東西方言の違いの生起に、民族の移動がかかわり、基層語が関与したとするものです。平たく言えば、西に母音を好む人が住んでおり、東に子音を好む人が住んでいたために、東西方言の違いが生じたと、この説は説明します。しかし、私はそのような考え方は妥当でないと考えますので、以下私の解釈を述べたいと思います。

二、東西方言の違いはいつどのようにしてなぜ生じたのか（その1）——ハ行動詞の音便の違いを中心に——

二・一　東西方言の違いと母音優位・子音優位

表2は、表1にあげた言語事象を改めて母音優位・子音優位という視点から見直したものです。この表からわかることは、東西方言間において母音優位・子音優位で顕著に対立しているのは①のハ行四段活用動詞の音便であるということです。

（表1）　東西方言間に母音優位・子音優位の違いが認められるという言語事象

言　語　事　象	西部方言	東部方言
①ハ行四段活用動詞音便	ウ音便	促音便
②形容詞連用形音便	ウ音便	原形
③促音化・促音挿入語	少ない	多い
④1音節名詞	長呼	短呼
⑤特殊音節とアクセント	核を担う	核を担わない
⑥母音の無声化	目立たない	目立つ
⑦アクセント	京阪式アクセント	東京式アクセント
⑧動詞命令形	ヨ＞イ	ロ
⑨断定の助動詞	ジャ＞ヤ	ダ

（表2）　①から⑨の言語事象と母音優位・子音優位

言　語　事　象	西部方言		東部方言	
	母　音	子　音	母　音	子　音
①ハ行四段活用動詞音便	＋			＋
②形容詞連用形音便	＋			
③促音化・促音挿入語		＋		＋＋
④1音節名詞	＋		または－	
⑤特殊音節とアクセント				
長音・i			－	
撥音・促音				－
⑥母音の無声化	－		－－	
⑦アクセント				
⑧動詞命令形	？			
⑨断定の助動詞	？			

二・二　ハ行動詞の音便における東西の違いは、いつ、どのようにして、なぜ生じたか

そこで、以下しばらくハ行動詞の音便における東西の違いがいつどのようにしてなぜ生じたのかについて考えてみたいと思います。表3は、現代からさかのぼってハ行動詞の音便が文献資料にどのよ

うに現われるかを見たものです。現代では西部方言ウ音便・東部方言促音便で対立していますが、室町時代末期にさかのぼってみると、西部方言はキリシタン資料からウ音便専用であったことがわかりますが、東部方言では洞門抄物から促音便専用ではなくウ音便を併用していたことがわかります。これらのウ音便を従来は西部方言からの借用と説明してきたのですが、私は、ハ行動詞の音便の変遷全体を見る時は、東部方言においても固有にウ音便が生じていたと見る方がよいと考えます。

次に平安・院政・鎌倉時代にさかのぼって西部方言の資料を見ますと、そこではウ音便専用ではなく、促音便が併用されています。従来は、ここでも、この促音便を東部方言の混入と説明してきたのですが、今日では、その見つかっている用例数と用いられ方とから見て、そのように見ることは不可能であると考えられます。次に平安・院政・鎌倉時代の東部方言の状態ですが、この時代に成立した確かな東部方言資料がないためにはっきりしたことはわかりませんが、室町時代末期が促音便・ウ音便併用であり、平安・院政・鎌倉時代の西部方言が促音便・ウ音便併用であるところからは、促音便・ウ音便併用であったと推定するのが自然ではないかと考えます。つまり、平安・院政・鎌倉時代までさかのぼると、ハ行動詞の音便について東西間に違いはなかったということになります。

(表3) 時代をさかのぼって音便の現われ方を見る

時代	西部方言	東部方言
平安・院政・鎌倉時代	促音便・ウ音便併用	(促音便・ウ音便併用)
室町時代末期	ウ音便専用	促音便・ウ音便併用
江戸時代	ウ音便専用	促音便専用へ移行
現代	ウ音便専用	促音便専用

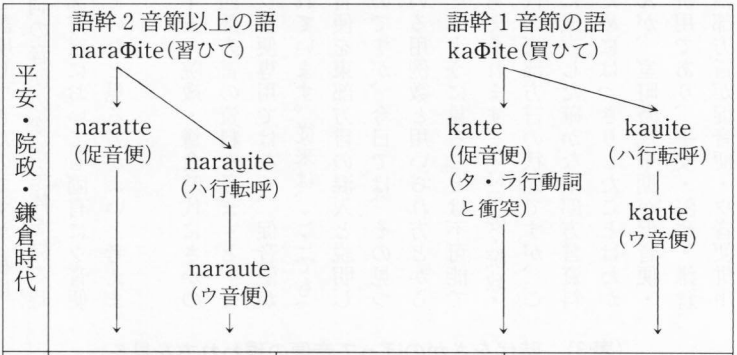
それでは、現代までの間に、いつ、どのようにして、なぜ西部方言ウ音便・東部方言促音便という違いを生じたのでしょうか。表4によって、今度は時代を下って違いが生じた道筋を追ってみたいと思います。まず、平安・院政・鎌倉時代ですが、ここでは語幹二音節以上の語と語幹一音節の語とを分けて見る必要があります。原形、例えばnaraΦiteから促音便naratteが生まれます。ところが、語幹一音節語の場合には、タ・ラ行動詞が先に促音便を起こしていたので、これと衝突することを避けてハ行動詞は原形でとどまる傾向が強かったものと見られます。音便が生起した早い時期においては原形が併用されていましたから、語幹二音節以上の語の場合にも原形が併用されていたわけですが、語幹一音節語の場合にはその傾向が一層顕著であったと見られます。そうしているうちに、原形にいわゆるハ行転呼現象が生じnarauite, kauiteの形が生まれます。そして、この形からウ音便形naraute, kauteが生まれたことは申すまでもありません。このようにして生まれたウ音便形はタ・ラ行動詞との衝突を避けることができる形でした。こうして、ハ行動詞の音便は古い促音便から新しいウ音便へと交替が進んでいくことになります。しかし、語幹二音節以上の語の場合にはタ・ラ行動詞と衝突しませんから、交替はゆっくりと進んでいったものと見られます。

そのようにして、室町時代末期には、表3で見たように、西部方言ではウ音便への交替が完了しており、東部方言では交替が完了し

ておらず、いまだ促音便・ウ音便併用の時代にあったものと、説明することができます。このまま何も起きなければ、東部方言でも遠からずウ音便専用になっていたものと見られます。

ところが、ここにオ段長音の開合の混同が生じます。表5に例示したように、オ段長音の開合が区別されている間はウ音便形は一応

（表4）　時代をくだって東西の違いが生じた道筋を追う



室町末期	(促音便・ウ音便併用)	ウ音便専用 narɔ:te kɔ:te	促音便・ウ音便併用 naratte, narɔ:te katte, kɔ:te
現代	促音便・ウ音便分用 narati, naratte, ko:ti, ka:te	ウ音便専用 naro:te ko:te	促音便専用 naratte katte
	沖縄・山陰方言	西部方言	東部方言

語幹を保持していましたが、開合が混同すると、ウ音便形は語幹を保持できない具合の悪い形となってしまいました。そのため、東部方言では、具合の悪くなったウ音便形を捨てて、併用していた促音便形の方を使うようになったものと考えられます。そのようにして、江戸時代を経て、現代までの間に促音便専用となったものと考えられます。西部方言においてもウ音便形は具合の悪い形となったわけですが、こちらの場合はウ音便形を専用していましたから、これを捨てることができず、ウ音便形をいわば我慢して、今日まで用い続けているものと見られます。

なお、表の左はしに西部方言の外に位置する沖縄・山陰方言の様子を示しておきました。これらの方言では東部方言と同じように主として促音便を用い、タ・ラ行動詞と衝突する語幹一音節語の場合だけウ音便を用いています。[注1]

（表5）　オ段長音開合の混同によるウ音便形の語幹の動揺

開合	連用形＋テ	語幹	
区別	narɔ:te soro:te	nara soro	語幹保持
混同	naro:te soro:te	nara, naro soro	語幹動揺

二・三　形容詞連用形の音便と断定の助動詞における東西の違い

次に、形容詞連用形の音便と断定の助動詞ジャ・ダの東西対立について簡単に触れておきます。形容詞連用形の音便における東西の違いは、ハ行動詞の場合とほぼ同じように説明できるものと考えられます。すなわち違いが生じた直接の原因はやはりオ段長音の開合

の混同であったと見られます。（表6）

また、断定の助動詞ジャ・ダの場合は、東西どちらにも、古くダが生じ、遅れてヂャが生じたものと見られますが、東部方言ではダ・ヂャを併用している時代に、di に破擦音化が生じたために、語幹をd音で保持できるダの形の方を選んだものと考えられます。これに対して、西部方言ではヂャ専用の時代になって di に破擦音化が生じたためにジャを用いることになったものと説明できます。（表7）

（表6）　形容詞連用形における東西の違い

時　代	西部方言	東部方言
平安・院政・鎌倉時代	原形・ウ音便併用	原形・ウ音便併用
室町時代末期	ウ音便専用	原形・ウ音便併用
現　代	ウ音便専用	原形専用（例外〜ゴザイマス）

（表7）　断定の助動詞における東西の違い

時　代	西部方言	東部方言
破擦音化が起きる前	ダ・ヂャ併用	ダ・ヂャ併用
破擦音化が起きた時	ヂャ専用	ダ・ヂャ併用
現　代	ジャ専用	ダ専用

二・四　ハ行動詞の音便、形容詞連用形の音便、断定の助動詞における東西の違いについての考察から確認されること

以上考察してきたところから、私は次の四つのことを確認したいと思います。まず第一は、東西方言の違いはある特定の原因があって生じているということです。例えば、ハ行動詞の音便の場合は、オ段長音の開合の混同が原因となって、二つの方言は違う道を歩まざるをえなかったということです。

従って、第二に確認したいことは、東西方言の違いに基層語はかかわっていないということです。母音優位・子音優位の違いが原因であるとは考えられないということです。

第三に確認したいことは、東西方言の違いは比較的新しい時期に生じたものであるということです。ハ行動詞と形容詞連用形の音便の違いは江戸時代以降に生じたものであり、断定の助動詞ジャ・ダの違いは室町時代に生じたものと推定されました。

第四に確認したいことは、古い形を選んだ方言がいつの日か新しい形を選んだ方言の後を追って新しい形に変わるのではないということです。二つの方言はある時ある特定の原因によって違う道を歩まざるをえなかったわけですから、後を追って変化することはないわけです。

三、東西方言の違いはいつどのようにしてなぜ生じたのか（その2）——アクセントの違い——

今確認した四つのことを東西アクセントの違いの問題にそのままあてはめてみたらどのようになるかということについて考えてみました。

三・一　金田一春彦博士説

東西アクセントの違いについても、基層語を想定したり、母音優位・子音優位の違いが原因であるとしたりする立場がありますが、その方向の考察は有効でないと考えます。

私は、基層語を想定していないこと、東西アクセント分離の時期を比較的新しいものと推定していることから、金田一春彦博士の説が最も蓋然性の高い説であると考えます。[注2] 金田一博士は、院政時代の京阪式アクセントから、労力の節約のために、アクセントの山が後ろへすべっていって、東京式アクセントが生まれたとされますが、この変化の経路についての説明（ただし語頭が高くなる変化についての説明は除く）も説得力をもつものと考えます。

三・二　東西アクセント間に違いを生みだした特定の原因

ただ、この説は、京阪式アクセントから東京式アクセントがどうしても分離せざるをえなかったものであるという考え方はしていません。[注3] 私は、先に確認したところから、アクセントの場合にも、東西間の違いが生じざるをえなくなった特定の原因がどこかにあったのではないかと考えてみたいと思います。ある方言とある方言との間に違いがある場合、違いが生じた原因が必ずなくてはならないというものではありません。しかし、特定の原因があったと考えると、後で述べますが、説明が容易になることが少なくありません。

そこで、そういう目で見てみますと、私は、表8にあげた二音節第二類動詞連用形＋テのアクセントが注目されるのではないかと考えます。南・金田一・秋永三氏によると、二音節第二類動詞連用形＋テのアクセントは、はじめカキィテ・ヨミィテ・ウチィテと低・下

（表8）　2音節第二類動詞の音便とアクセント

	2音節第二類四段活用動詞		第一類動詞	
音便が定着する前	○◐▶ ↓ ○◐▷ ↓ ○●▷ （例　書キテ，読ミテ，打チテ）（助詞「テ」との結合度が高い）		●○▶（例　咲キテ） ↓ ●○▷	●●▷
音便の定着	○●▷（書イテ） ↓ ○○▶	●○▷（書イテ）	●○▷	↓ ○●▶
	西部方言	東部方言	西部方言	東部方言
	特殊音節が単独でアクセントの山を担う	特殊音節が単独でアクセントの山を担えない		

降調・高であったと見られます。やがて動詞と助詞テとの結合度が高くなると、テが低くつくようになり、低・下降調・低になったと見られます。ここに音便が起きると、促音便は下降調を維持することができず、低・高・低の形になったものと見られます。カイ|イテ・ヨン|ンデは下降調を維持できたと見られますが、この場合も、ai・onnなどのような連続が長くは維持されず、低・高・低の形になったものと推定されます。そうなると、原形の方も下降調を失って、低・高・低の形になっていったのではないかと推定されます。

音便形と原形とが併用されている間は、カイテ・ヨンデ・ウッテなどの低・高・低のアクセントの形は維持されていたと考えられますが、音便が定着し、音便形だけが行われるようになると、東西方言間で違いが生じることとなったのではないかと考えられます。現代東京方言について特殊音節が単独でアクセントの山を担うことができないことが注目されていますが、音便が定着した時代においても東京方言がこの性格をもっていたとしますと、そして、私は、東京方言がこの性格を古くからもっていたと推定する者ですが、そうだとすれば、東京方言ではカイテ・ヨンデ・ウッテなどの低・高・低のアクセントを維持することができなくなり、カイテ・ヨンデ・ウッテなどと高・低・低の東京式アクセントに変わらざるをえなかったことになります。[注4]

『方言文法全国地図2』によると、「飽キル」という動詞は、東京式アクセント地域において、音便を起こさず、上一段活用に活用を転じていますが、これも同じ視点から説明できるものと考えられます。

以上をまとめると、次のように言えるのではないかと考えます。すなわち、労力の節約のためにアクセントの山が後ろへすべるという変化の動きがあり、その上に今述べたことが直接の原因となって、東京式アクセントが生まれることになったのではないかということです。音便は四段活用動詞のすべての語に起きましたから、ここに起きた変化の動きは相当大きな力となったものと見られます。また、服部四郎博士が早く指摘されたように、連用形にアクセントの型の変化を生じると、それは他の活用形にも及んだはずで、連用形＋テのアクセントがカイテ・ヨンデ・ウッテなどのように変化すると、例えば、終止・連体形もカク・ヨム・ウツの形に変化したものと推定されます。[注5]

三・三　音便の定着という特定の原因を認めることの利点

東西アクセントの分離が特定の原因によって引き起こされたものであり、その原因が音便の定着であったと考えると、うまく説明できるようになることがいくつかあります。まず第一に、京阪式アクセント地域が東京式アクセントに変わっていないことの説明が容易になると思います。

第二に、東京式アクセントが分かれた時期に必然性が出てくるということです。金田一・奥村両博士によると、東西アクセントが分離した時期は、漢語の定着から外来語の定着までの間であると推定されており、その推定は妥当なものと考えますが、東西アクセントの分離がどうしてほかならぬこの時期に生じなくてはならなかったのかと考えた時、音便の定着によって東京式アクセントが分離せざるをえなかったのだと考えると、よく理解できます。

また、東西アクセントの違いが非常に大きな激しいものであると

ころから、二つのアクセントが分かれた時期が近いはずがないと考えて、約二〇〇〇年前、更にはもっと古い時期に分かれたとする説が出されています。しかし、音便の定着に直接の原因があったことが認められるならば、近い時代の分離が無理なく理解できることとなります。

四、東西の新古ということ

表9は、ハ行動詞の音便、断定の助動詞ジャ・ダ、アクセントの三つの言語事象の分布を、古い形、新しい形という視点から整理したものです。今までは主として東西の違いしか問題にしませんでしたが、表には西部方言の外に位置する方言（今仮にそれを外西部方言と呼んでおきます）も取り上げています。これを見ると、ハ行動詞の音便と断定の助動詞の場合には外に古い形が分布しています。これに対して、アクセントの場合には外に新しい形が分布しています。ここから、外に分布する東京式アクセントの方が古いのではないかと考える人がいたり、そこまでは考えないまでも、この分布に認められるずれを整合性をもって無理なく説明する必要があると言われたりしてきました。しかし、今まで考察してきたことが認められるとしますと、東西方言間に、変化の遅速などのために、置かれている言語状態に違いがあるところに、何かある特定の原因が働いて、ある方言は古い形の方を選ばざるをえず、他の方言は新しい形の方を選ばざるをえなかったものと考えられました。その時の状態の違いと起きた原因がどのようなものであったかということによって、時には古い形の方を選ばざるをえなかったり、時には新しい形の方を選ばざるをえなかったりするのは当然のことであると考えられます。外が古かったり、新しかったりするのは何の不思議もないことと考えられます。

（表9）　東西の新古ということ

言語事象	外西部方言	西部方言	東部方言
①ハ行動詞音便	古（促音便）	新（ウ音便）	古（促音便）
⑨断定の助動詞	古（ダ）	新（ジャ）	古（ダ）
⑦アクセント	新（東京式）	古（京阪式）	新（東京式）

五、おわりに

以上、東西方言の違いがいつどのようにしてなぜ生じたのかということについて私の解釈を述べました。それは同時に母音優位・子音優位の違いが原因でないことについて述べたことにもなると思います。[注6]

本日のテーマである音節構造の変遷の問題には二つの点でかかわりました。一つは、特殊音節が生じる時、西部方言に母音のものが生じ、東部方言に子音のものが生じるというように言われてきましたが、そのような違いはなかったという点です。二つは、特殊音節が単独でアクセントの山を担うことのできる方言、すなわちモーラ方言と、担うことのできない方言、すなわちシラビーム方言またはシラビーム性を帯びたモーラ方言（東京方言など）との違いが、東西アクセントの違いを生み出す直接の原因になったのではないかという点です。

注1　当日のコンヴィナーの一人添田建治郎氏は、ハ行動詞の音便にウ

音便と促音便との両方を行っている方言にオ段長音の開合の区別が残っている例として、新潟県中越・南越とその周辺ほか、佐渡地方、愛知県三河地方の一部、埼玉県東部地方の一部があることを教示された。

注2　金田一春彦「東西両アクセントの違いができるまで」（文学　一九五四・八）ほか。

注3　金田一博士は、音韻現象は中央が保守的で、地方が急進的であることによると説明されている。

注4　東京方言はシラビーム性を帯びたモーラ方言である。そのために、特殊音節が一音節として独立しているけれども、他の音節に比べると存在として弱く、単独でアクセントの山を担うことができず、アクセントがこのように変化しなくてはならなかったものと考えられる。

なお、発表では、シラビーム方言である二型アクセントや一型アクセントに触れることができなかったが、それらの方言では、特殊音節が独立しえず、前の音節と一体となって一音節となる方言であるため、二音節第二類動詞に音便が定着した時、アクセントの高低も前の音節と一体となっているものと考えられる。

注5　東西両アクセントの違いが問題にされる時、三音節以下の単位が問題にされて、四音節以上の単位については問題にされることが少なかった。四音節名詞について東西両アクセントを比較してみると、京阪式アクセントで高くはじまる語は東京式アクセントで低くはじまるようになっていて、労力の節約で説明できるが、京阪式アクセントで低くはじまる語は東京式アクセントでもそのまま低くはじまっていて、高くはじまるようには変じていない。これは、東西両アクセントの違いが生じた直接の原因が、二音節第二類動詞連用形＋テの形、即ち三音節単位にあり、それが二音節単位に及んでいったとする筆者の解釈によってうまく説明することができるように思われる。また、平安・鎌倉時代の京阪アクセントが○○●○であったところの四音節名詞が東京アクセントで○●○○になっている例も、三音節第二類動詞連用形＋テのアクセントが○○●▽（動イテなど）から○●○▽に転じなくてはならなかったことにひかれたものと考えてよく理解できるように思われる。上野善道氏は、講演「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」（一九九三・一二・一七）の中で、東西両アクセントの違いについて論じる際、四音節以上の単位にも目配りすべきことを述べられた。

なお、「京阪式アクセント」「東京式アクセント」という術語が定義されないまま行われてきたことが問題にされているが、筆者は、二音節動詞（第二類及び第一類）連用形＋テのアクセントの形がどのようになっているかを中心に据えて定義すべきものと考える。

注6　筆者は、東西方言の違いを民族の移動や母音優位・子音優位の違いで説明する説を否定するものであるが、日本列島に住む人々が歴史を通じて単一であったなどということを主張しようとするものでは、勿論、ない。

〔付記〕本文は記憶の範囲で当日の発表のままとしたが、標題に副題をつけ、表の見出しと表4・8の一部を訂正したほか、新たに注を加えた。また、紙幅の都合で、表を一つ省略し（それにともなって本文も一部改めた）、明示すべき先学の論文を注に加え得なかった。なお、アクセントについては別に詳しく論じたい。あたたかい御指導を下さったコンヴィナーはじめ関係の方々、また発表会場で、あるいは発表後に種々お教え下さった方々に、心より謝意を表します。

――愛媛大学教授――